



愛媛バド通信

発刊：愛媛県バドミントン協会

編集：広報委員会

Vol.17

先日、平成25年9月7日・8日に開催された愛媛県バドミントン協会主催の強化練習会に参加していただいた、山田和司選手(日本ユニシス)と、関谷真由選手(九州国際大学付属高校職員)に『愛媛出身の日本リーガー』というテーマで、インタビューをお願いしました。お二人とも、忙しいスケジュールを縫って、故郷である愛媛県の強化練習に参加していただいた事を、この場を借りて御礼申し上げます。



山田 和司

Kazushi Yamada

1987.2.21生まれ
新居浜市出身

角野中学→
小松原高校→
日本体育大学→
日本ユニシス



関谷 真由

Mayu Sekiya

1987.2.25生まれ
新居浜市出身

中萩中学→
九州国際大学付属高校→
早稲田大学→
三洋電機(パナソニック)→
九州国際大学付属高校職員





幼き山田選手がバドミントンを始めたのは、小学三年生の頃、コーチ兼選手でもあったご両親とお姉さんが、バドミントンをさせていた事がきっかけである。当時、練習に行く3人を見て、一人で家に居たくなかったから、体育館にくっついて行っていたとの事。『体育館に行っているうちにいつの間にかラケットを握っていました。』と笑いながら語る。それ以来、ご両親からのバドミントン教育が始まるわけだが、山田少年は両親に教わるのが、非常に嫌だったと心中を語る。『プライド？みたいな、何かがあったのでしょうか？一度だけ辞めたいとも思いましたが、嫌々やらされました』と。子供ながらに反抗心ももったようだが、今の自分が有るのは、それでもそんな自分にバドミントンを続けさせてくれた、ご両親の力が大きいとつくづく感じている。

中学時代には、全国大会に出場できなかったことが原因で、父に辞めろと言われたり、練習態度に対して、現中萩中学教員である西原氏に辞めてしまえと言われたり。しかし、心底バドミントンを愛していた山田少年はひたすら練習に励んだ。そんな西原氏を恩師と慕い、『角野中学の生徒である自分を、当時船木中学の教員であった西原先生が練習に誘ってくれる』そのような特異な環境に感謝をしながら今日を歩んでいる。

高校生活は、埼玉県小松原高校に舞台を変える。日常生活は顧問の先生の家で一人暮らし。その後、栃木から小松原高校に来た後輩と同じ部屋でルームシェア生活をしたと言う。慣れるまでは実家が恋しかったが、慣れてくると先生の子の居心地がよくなったようだ。そんな高校生活で、明るく人に接する彼の人間性が形成されたのであろう。高校3年のインターハイでは、最良のパートナーであり、最大のライバルであった遠藤選手(現日本ユニシス)とのダブルスで、息のあったプレーで見事優勝し、有終の美を飾った。



大学生活では日本体育大学へ進学。4回生の時には、同じ新居浜市出身の関谷真由選手(当時:早稲田大学)と二人揃ってインカレ優勝(シングルス)の衝撃を巻き起こす。当時の試合を振り返って、『大学では遠藤以外には負けてなかったんです。その遠藤が怪我で出場できなかったのも、彼の為に優勝したいと思いました。遠藤からも、お前なら大丈夫だ！という言葉が貰い、すごく励みになりました。』まさに、友情をパワーに変えた素晴らしい優勝だったと言える。

現在は日本ユニシス株式会社に入社され、半日は仕事に従事し、午後からは多くて6時間の練習をこなしている。入社後は、全日本総合3位、世界選手権ベスト8(日本人男子としては30年ぶり)などの活躍を見せる。現在の背番号について尋ねてみると、『背番号2番に特に意味は無いんですが、もうすぐ7番に代わりますよ。池田慎太郎さんが7番を空けてくれたんです。』と7番の重みを、噛み締めながら語った。

山田選手自身に、自分のプレースタイルと特徴を分析してもらった。『自分の目指すプレーはサーブ周りで相手の嫌がる選手になることですね。サービスは変化を加えれば、単なるスタートではなく、サッカーで言うフリーキックに代わりますから。サービスと、その返球を相手の嫌なところに返すテクニックが自分の特徴だと思います。サービスを制するものはゲームを制する。』と語る。彼自身、周りから見たジャンプしてのクロスショット等の派手なプレーよりも、サービス周辺の一見地味ではあるが、効果の大きなショットを重視してプレーしているようだ。

近年、シングルス中心だったバドミントン生活から、ダブルスに転向。転向の理由を尋ねると、『チーム事情ですよ。ダブルスも視野に入れて、両方出来る選手になります』と答えてくれた。現在26歳の山田選手。世界ランクを上げてナショナル入りし、30歳くらいまでは現役選手として頑張りたいと、今後の展望を話してくれた。彼が30歳の年には、リオデジャネイロオリンピック。そこで是非日本代表に選ばれて貰いたい。

印象に残っている試合は？と聞いてみると、ピーター・ゲードとの試合が最高に印象に残っていると話してくれた。子供の頃に憧れていた、ピーター・ゲード選手と楽しく試合が出来た。負けこそはしたが、『負け試合こそ得るものが大きい』と語る彼には、最高の経験値を得た試合になったに違いない。

最近、東京スカイツリーから徒歩15分のアパートに引っ越したという山田選手。スカイツリーを見てデカイなーいつも思っているが、未だに上ったことが無いと言う。スカイツリーのようにでっかく、日本を代表するさらに大きな選手になってくれることを期待し、このインタビューを締めたいと思う。



関谷真由選手がバドミントンを始めたのは9歳。山田選手と同級生である彼女は、クラスの友達に誘われて、適当に軽い気持ちで練習に参加した。感想は？と尋ねると、『バドミントンって、めっちゃきついなあと思いました。』とにこやかに答えてくれた。初めての練習で20分間走らされて、即辞めたいと思った、これが彼女の本音であり、後にも先にも現在まで思った事の無いバドミントンへの嫌悪感であった。そんな関谷選手はバドミントンが大好きで、中学校に進学すると、迷いもなくバドミントン部に入部。初めての練習以来、バドミントンに熱中し、沢山の人間関係を構築しながら、バドミントンを楽しんでいた。

山田選手と同じく、彼女のジュニア時代には、無くてはならない存在の一人に、現中萩中学教員である西原氏がいる。関谷選手は、『西原先生は、常に世界を見ると、言い続けてくれたので、世界を見てみたいと言う気持ちで頑張れました。』と語る。中萩中学の後輩や愛媛の子供たちに、『自分に秘められた可能性を信じて、がむしゃらに頑張してほしい。』と。



高校時代は女子寮に入り、先輩や友人と共同生活をされていた。一年生の時のお盆には、愛媛に帰省出来ずホームシックになったという。また、後輩が先輩の洗濯も行うという体育会系な部活動生活であった。先輩の衣類が他の先輩の物と混ざって、叱られた記憶も今となってはいい思い出。当時は、友人と愚痴をこぼしながら洗濯物を畳んだそうだ。そんな体育会系な部活動で、彼女のきちんとした礼儀や、温厚で人当りの良い人間性が確立されたのであろう。また、お風呂は男子寮に入りに通っていて、入浴時に男子生徒が間違えて入ってきたという面白エピソードも話してくれた。

大学は早稲田大学に進学。4年生の時には、同じ新居浜市出身の山田和司選手(当時:日本体育大学)と二人揃ってインカレ優勝(シングルス)の衝撃を巻き起こす。当時の試合に向けた意気込みは、『当時、三洋電機に入社が決まっていたんですが、インカレ優勝できなかったら、胸張って入社できない。そんな気持ちで練習しました。』と、強烈なプレッシャーを感じながら、同大会に向けて自分作りに励んだ過程を話してくれた。

そんな関谷選手は、大学卒業後は三洋電機に入社し、大阪国際準優勝など各種大会で活躍。ヨネックスオープン2009では世界ランキング10位の蔣燕皎(ジャン・イエンジャオ)を破ってベスト8入りするなどの快挙を成し遂げた。背番号について聞いてみた。『14番。なんとなくです。記事になりませんね。』と。いや、記事にさせていただきます。



三洋電機は、諸事情のためパナソニックの子会社に、バドミントン部も名前を変えた。同バドミントンチームは2012年に経営合理化の為、休部となる。現在は母校である、福岡県の九州国際大学付属高校の職員として、学生にバドミントンの指導を行いながら、自らも選手としてバドミントンと向き合っている。

昨年怪我に悩まされている関谷選手、『怪我から復帰し、プレーできるようになるのが目標だったので、今年の全日本社会人でベスト16に入れたので一先ず良かった。』と語る。しかしながら、イメージしている動きと今の動きがかけ離れている苦悩も彼女を苦しめているのが現状だ。今後の抱負として『自分自身がどこまでやれるかを自問自答しながら、バドミントンに向い合いたい。新たなバドミントンを探すのが目標ですね。結果も求めたいが、自分がどういうバドミントンをすればいいか。今の生活スタイルで勝てるバドミントンを見つける事が出来れば良いですね。』と、前向きで明るい関谷選手を象徴しているような抱負を抱えている。

関谷選手自身に、自分のプレースタイルと特徴を分析してもらった。『やっぱりオーバーヘッドストロークからのショットが武器ですね。自分自身は、我慢してシャトルを拾えるプレーヤーだと思います。』と語る。広い守備範囲と、決め球を有する攻撃的な選手と言える。

印象に残っている試合を尋ねてみた。『基本的に負け試合はすべて、気持ちが撃沈です。最高の勝ち試合は、全日本実業団の2-2で迎えた第3シングルスでの勝利です。』団体戦でのプレッシャーに打ち勝つ彼女の強靭な精神力を象徴するかのような返答であった。

憧れている選手は、シドニー金メダリストである中国の龔智超(ゴン ジーチャオ)選手。ずっと憧れていた選手で、どこが憧れかと尋ねると、『もー、全部です。プレー的にも精神的にも最高に強いんです。』と、急にキラキラした目で、憧れの選手のことを語る一ファンになった。また、男子シングルスのリ-・チョンウェイ(マレーシア)とリン・ダン(中国)の試合を見るのが好きだという関谷選手。この二人の戦いに、自分を重ねて得るものが多くあり、またそれを実践してきたからこそ、今の関谷選手があるのであろう。

先日、東京オリンピックが決定した事は、もちろん関谷選手も承知している。彼女は『世界最高の舞台が東京に。嬉しいですね。純粋にバドミントンを楽しみ観戦したいですね!』と。心からバドミントンを愛している事が良く分かる一言であった。これからも、自分自身の新しいバドミントンを模索して、素晴らしい選手になってくれると期待したい。